

アトリエ 琉游舎 だより 173号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2024年2月28日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>

彼岸会・涅槃会法要

3月23日（土）10時半から

- 今年も琉游舎では春の彼岸会法要を行います。彼岸会は亡くなられた方を供養し墓参りをして先祖を偲ぶ日と思われませんが、私の考える彼岸は死後の世界ではなく、この日々の中で自分なりの安らぎの処（彼岸）を思いそこに安らぎの処を見いだすことです。そして私のいのちが永遠のいのちとしてあること、それを繋いでくれてきた生きとし生けるものに感謝する日です。今年は同時に涅槃会の法要も行います。涅槃会はお釈迦様の命日に行う法要です。
- 彼岸会は春分の日（20日）に行う法要ですが、今年はお釈迦様の命日が新暦の24日にあたるため、二つの法要を同時に行うことに致しました。お釈迦様の命日は旧暦の2月15日と言われています。歴史的事実として正しい日かどうかは分かりませんが、昔からの言い伝えです。
- 2つの法要は儀式の内容も違います。わたしの宗派、日蓮宗が定めた「宗定日蓮宗法要式」の教科書通りに行うと差定（式次第）が異なることになりませんが、わたくしは今回同時に行う意味を考えて、わたしなりに考えた差定（式次第）で法要を行いたいと思います。
- 法華経は全ての生きとし生けるものが仏となることができると教えます。その教えを唱え実践した方がお釈迦様です。お釈迦様が今につながる永遠のいのちの始まりです。お釈迦様の死によって始まった、永遠のいのちを繋いで、受け取り、その先に繋げていくことが、仏様と共に毎日を生きるということです。3月23日はその毎日を立ち止まってゆっくり省みる日になればと思います。そんな思いを込めて行う彼岸会・涅槃会法要に是非お越し下さい。
- 琉游舎の活動は営利事業ではありません。お布施や供物は一切お構いなきようよろしくお願い申し上げます。琉游舎は宗教宗派を問わない、すべての方のための開かれた「場」です。

3月スケジュール

月 火 水			木	金	土	日
			29 映画会 お休み	3月1日	2	3 写経会 13時半から
4	5	6	7 映画会 お休み	8	9	10
11	12 読書会 13時半から	13	14 映画会 お休み	15	16	17
18	19	20	21 映画会 お休み	22	23 10時半から 春の彼岸会 涅槃会法要	24
25	26 読書会 13時半から	27	28 映画会 13時半から	29	30	31

読書会

3/12・26
(火) 13時半

写経会

3/3 (日)
13時半から

映画会

3/28
(木) 13時半

隣町のさくら市はわたしが18歳までを過ごした土地です。当時は氏家町の名称で人口2万、江戸時代は奥州街道の宿場町で鬼怒川を利用して東北の物資を江戸に運ぶ水運の基地でも発展した交通の要衝です。また全国に広がる「氏家」姓の本貫地でもあります。平成の大合併で隣の喜連川町と合併してさくら市となりました。喜連川町も奥州街道にあり足利氏の末裔が喜連川藩を治める大名格の格式を持つ城下町でした。この歴史も由緒もある名前の2町が合併してできた市の名称が「さくら市」と知ってわたくしは驚愕しました。歴史も地勢的な痕跡も住む人々の生活も感情も何もかもきれいさっぱり捨て去って、桜が咲く場所なら日本中どこでも当てはまる無味乾燥無個性な名前になっていたのです。土地の名前はその地の形状風土歴史の蓄積です。一步譲ってさくら市の名称を前向きに考えるなら、土地にまつわる垢を洗い流し、新たな未来に向かって歩み出そうとの決意表明とも取れるかも知れません。地方都市唯一無二の市が「さくら市」となるための荒療治、まずは無個性、白紙からの出発の意味と取るしか驚愕を抑える方法がありませんでした。

40年間の東京での生活を終い、ふるさとに戻って定住した所は小高い丘陵と川を隔てた隣町矢板市です。かつては急行が止まり、大企業シャープの工場があり、県の出先機関も置かれていました。当時は宇都宮と那須地方の間にある塩谷地区の中心の市でしたが、今では人口が減り続け市の中心を貫く国道四号線の片側を大きく占めたシャープの跡地は、撤退後行政の無為無策で放置されたままでした。一方さくら市の人口は4万5千、ホンダの研究所やテストコースがあり活気溢れ、気がつく矢板市と立場の逆転が起きてしまったようです。この現象に住む人々の願いや意志の総体、または街を率いる人のリーダーシップの結果と言ってしまうえば、住み続けている人には酷に聞こえるかも知れません。現状を直視しないままの衰退と、荒療治でもそれが活気につながっていったことの現実を見れば「さくら市」の名称は吉と出たのかもしれませんが。

吉と出た名称変更で街の様相も変わった、とわたしが実感することのひとつに「さくら市ミュージアム」があります。先日30周年を迎えました。わたしは縁あってこの諮問機関と言えるさくら市博物館協議会の一員となっており、先日周年記念の式典に参加しました。育った当時は文化的催しも施設も皆無だったいわゆる文化不毛の地の氏家町でしたが、この規模の地方都市では分不相応にも見える充実した内容の市営ミュージアムを30年も運営し支え続けてきた市民の熱意と努力に、生まれ変わったさくら市の文化的土台を作るとの強い意志と希望を感じます。常設のさくら市の歴史コーナーは私が住んでいた当時は知りたくても知りようがなかった広範な歴史まで資料を提示しながら教えてくれます。ここに学んだ小中学生は強い郷土愛と誇りを抱くはずです。このような環境が授業や教科書からだけでは得られない文化や教養の基礎を養うものです。そして数年後には街の基礎体力を底上げし、街にさらなる活気をもたらすことでしょう。

さくら市ミュージアムは常設の歴史展示だけでなく企画展も充実しています。毎年行われる「春の院展」、また30周年記念式典に続いて開催された「平山郁夫展」は今回で7回目になります。大都市に行かなければ見ることのできない展覧会が毎年のように開催されています。今回の平山郁夫展は絵画だけでなく、釈迦の一生を描いた素描や仏教遺産の展示でシルクロードを通して日本に伝来した仏教の道を辿る、とても企画力のある展覧会でした。特に平山夫妻が敦煌やガンダーラなどで収集した仏像などはイスラム原理勢力に破壊された仏教遺産を少しでも後世に伝えたいと言う強い願いの感じられる収集品です。平山郁夫画伯が自ら描くことで、また仏教遺産を守ることで、お釈迦様の永遠のいのちを繋いでいるのです。数え切れない無名の人々のいのちを通してわたくしが今、永遠のいのちに触れることができることを実感する展覧会でした。

シルクロードに残された仏教遺産はイスラム原理主義者に次々に破壊されてきました。2001年に世界遺産のバーミヤン石仏が破壊された映像はショッキングなものです。私たちには世界遺産（文化財）だと思っても、イスラム教にとっては邪教の偶像崇拜の象徴です。仏教を除けば本来宗教は排他的で攻撃的なものです。他民族、他宗教との接触が増えるに従って排斥と改宗の方法だけでは社会秩序が保たれなくなります。そこで政教分離、法律、倫理、文化、教育というような概念が生まれ、異宗教同士の共存が可能になってきました。協調と平和の実現です。しかしひとたびそのバランスが崩れ政治的な動機が入ると戦争や破壊が始まるでしょう。宗教が文化であることは不可能なのです。宗教は理性によって構成されてはいないからです。

宗教の攻撃性、排他性は一神教を信仰する民族だけではありません。日本でも廃仏毀釈という野蛮で暴力的な排斥が明治維新に起きました。仏教は日本伝来より、土俗の宗教である八百万の神と習合して日本独自の神仏習合の信仰が江戸時代まで続いてきました。神域の神宮寺建設、神前の読経、神へ菩薩号の授与、阿弥陀如来の化身が八幡神と説く本地垂迹説も起こりました。廃仏毀釈が起こるまではカミとホトケは一体となって日本人の信仰を支え、それが日本独自の文化と教養の土台となっていました。ところが明治維新に薩長の文化破壊者たちが天皇の絶対権力の確立の意図に基づき、神道の国教化政策を断行しました。神仏分離令です。この法律を根拠に国学者などに先導された民衆は各地で廃仏毀釈の蛮行を働いたのです。仏堂、仏像、仏具、経巻の破壊です。現在その理不尽な破壊運動をくぐり抜け、文化財として寺や仏像などを見ることができるようになったのは、仏のいのちを今に繋ごうと守ってくれた無名の人々のおかげです。誰もが破壊者になり得るのが私たちである一方、遥かインドからの永遠のいのちを繋ぎ続けたいと願い行うのも私たちです。信仰は理性ではなく人々の願いの軌跡です。近くの羽黒山に登ると、頂上の羽黒山神社の鐘楼で鐘を打つ人々があります。神社で梵鐘。廃仏毀釈を乗り越えてここにも私たちの願いを響かせる神仏習合のすがたがあります。